

義母と近所の熟女に筆下ろしされる息子

祭りのその後に集会所で全裸乱交

きっかけは実母の病死だった。病床で必死の看病も届かず、実母を失いそれから3年後父親が再婚。新しい義母がミチユキの元へ来た。

以降、共に平穏な日々を暮らしてきた。ミチユキは学生である。

近々、ミチユキの住む町では地域の夏祭りが行われる。現在は夏休みの真っ最中。各地でお祭りが行われる時節だ。ミチユキは楽しみに胸弾ませていた。

父親のジロウは現在海外に長期出張である。半年前から日本を離れ、成功を収めた仕事を海外の会社で更に膨らませている。お金は山ほどある。よくある裕福な家庭の典型例といった感じだ。

父親は仕事に懸命に取り組む一方で家族想いでもあり、2ヶ月に1度、元気かという旨の手紙が二人の元に届く。ミチユキは必ず手紙を返していた。

お祭りは、地域啓発で近くの大学なども合同となり、街の活性化の一端とし

て年々規模を増している。ものの10年も前は本当に小さな地元住民たちだけが楽しむ小さなお祭りだったのだが、来年は学生なども共同で近くの河川敷のスペースを利用して小さなものではあるが打ち上げ花火大会を開催しようという話になっている。

だが、まだ祭り自体規模としては小さく地元住民たちだけでこじんまりやるという雰囲気は残っている。

祭りを4日後に控えた夜、義母のリョウコがミチユキに言った。

「あなたも随分と背丈も伸びたわねえ。ペニスの長さも太く長くなってるとに違いないわね。大人にならなければ駄目よ・・・お祭りの後、近所の女性の方たちと会ってみようか・・・」

ミチユキは2日後、何かに後押しされるように浴室の方へ向かった。

義母の入浴中である。午後9時の静かな夜のことであった。

虫の鳴き声と遠くの幹線道路に車が通る音が響く玄関の庭。閑静な住宅街。

人の声はしない。

浴槽を覗く。背德的であり、だけどミチユキの正直な自分の気持ちでもあった。

小さな小窓を開けた先には、リョウコの柔肌があった。

プリンと膨らんだ胸部と股間部の後ろの大きな小山。肌色の割れ目が見える。それはお尻と言われるもので、その谷間の底にはアナルと言うペニスを挿入するための穴がついている。前の鼠蹊部（そけいぶ）までは背中を見せていたため見えなかった。

はっきりと見えた。それは生まれた初めて見る女性の裸だった。

暖色を帯び背徳感を孕んだ妙な気持ちがミチユキに渦巻く。

・・・次の朝から、起床すればどういうわけか下着ははだけ、膨張したペニスがヘソに張り付いていた。

夢でずっとしごいていたと思われる。シーツには大量の精液が散らばって布

団はびしょびしょに濡れていた。

祭りの日がやってきた。

年々増す勢い。人も多く百人単位に膨れ上がっていた。数年前までは小さな祭りだったのが嘘のようだ。

簡易提灯が開催場所の公園のフェンスに掛けられ、少数ではあるが露天屋台が軒を並べている。賑わう人。そのほとんどが顔見知り、という地元の祭りならではの雰囲気は確かにあり、地元たちだけに愛される趣は残っているが。

「来年は打ち上げ花火かぁ。楽しみだなぁ」

酒を飲みながら話す地元住民たち。

祭りも終わりかけた頃、地元の熟女の一人、サユミがミチユキの手を引いた。

「集会所へ行きましょう！！十分お祭りは楽しんだみたいだし・・・」

地域の男性たちは露天の近くのテーブル椅子に座り、酒を飲み騒いでいる。

祭りの華やぎから少し離れた場所に歩いていくミチユキ。前を早歩きで先導するようにサユミは導く。

地域の集会所。地域の会計なども行われる場所。入口の戸を開くと、そこにはリョウコもいた。

祭りの後というか、祭りから少し離れた場所というものの静かさは一つの癒しでありそれとは対照的に妙な淫靡な色もしている。全員で合わせて4人の女性たちがいた。

体験版はここまでです。
